

## 古川松根宛中島広足書簡等

三ツ松 誠

①嘉永三年八月五日

残暑強御座候処、  
益御安泰被成御起居、  
奉拝賀候、爾来ハ扱々  
御疎遠奉存候、近来  
御詠草一向拝見  
不仕候、定而芳詠  
数首御出来と奉存候、  
当春海人のくゞつ  
といふ随筆上木  
仕候、其中ニ彼よろひの  
袖をかたしきて―  
をも入置候、御序ニ  
御覽可被下候、夫ニ付而ふと  
見出候江戸人松前之  
歌写入御覧候、其外も  
少々見出候もの御慰ニ  
入御覧候、○春之頃御返事ニ  
認物一葉、又彼何がし  
ぬし頼之短冊も認

さし出候ハ相達候哉、是ハ

達不達を一寸御尋

申進候意ニ御座候、猶後便

万々可申上候、あまり遠々

敷候故右迄、勿々頓首

八月五日

田翁

古川様

※『海人のくゞつ』の刊年から推定。

②八月二十五日

中島太郎広足、肥後熊本藩、長崎二住ス

望之芳翰、廿日

相達、難有拜見仕候、

益御安泰奉賀候、

然者又々不遠御東

行之由、御名残をしく

奉存候、宮市へも御立

寄可被成候由、宜々御伝

達可被下候、匡之状品ハ

長崎詰長州役人知音

御座候而、近々帰候故、

夫二相頼置申候、○御詠

草拝見加筆返上仕候、

御趣向御風調いと／＼めでたく

甘心仕候、○御地製之

半切文筒御恵投

被成下、千万難有

拝受仕候、扱々よく出来

候事と奉存候、先御礼答

勿々申進候、頓首

八月廿五日

田翁

古川様

江戸井上文雄歌、江戸人より書ておこせ候、

いといまだしけれど、

御慰二入御覧候

※広足が長崎に住み、また松根が鈴木高鞆の宮市を訪問するという話題が出ている。嘉永三年以後安政四年までか。

③嘉永七年三月 中島広足和歌書付

広足佐嘉に來りし時

ことのはの花もにほはめ此さとの

旅あやいかに淋しからまし

きのふ川上に物せしと聞て

花だにもせめてのこらばはる／＼と

きまし／＼かひもあるべかりしを

とよみて出したるかへしに

散にける

さくらを何か

いひつらむ

かゝる詞の

花さける

里

広足

※この時のことは『佐嘉日記』に描かれる。

④嘉永七年三月 中島広足和歌書付

御かへし

行春に

よしたぐふとも

立かへり

あふぎの風を

なほや

契らむ

広足

嘉永七年三月広足此佐嘉へ來りたる返らん

とする時

とゞまらぬ君が別れもあるものを春さへ

やがてくれんとぞする、とよみて出したる返

し也 饒別に扇子ども贈りし故、あふ

ぎの風とはよみ出つるなり

※この時のことは『佐嘉日記』に描かれる。

(佐賀県立博物館所蔵資料「古川松根あて書状ほか資料」)